



魘され草紙

痛田三

## 前書き

---

本作『魘され草紙』は、落語の即興演目である三題噺をもとに怪談を書こうというものだ。

三題噺を簡単に説明すると、出された三つのお題を用いて作られた物語のことである。本来ならばお題は「人名」「物品」「場所」とされる。しかし怪談において主役は人物ではなく怪異である。かといってお題を「怪異」とすると高確率でネタバレとなってしまう。そのため、ここでは「人名」の代わりに「(章ごとの) テーマ」とした。ときどき見当違いなお題があるかもしれないが、そこは大目に見てほしい。また、お題のどれかをオチに使うというのも廃止している。気軽さ優先の処置だ。

つまり、ルールはこう。

三つのお題「(章ごとの) テーマ」「物品」「場所」を使って怪談を書く

お題の選定は、あらかじめ登録しておいたいくつかの言葉をコンピュータによって無作為に抽出している。当初はこっくりさんにお任せしようと考えたのだが、そこまで暇でもないのか十円玉がピクリともしなかったための応急的処置となった。「蟲の章」からは低級霊のような友人に「テーマ」の部分だけを出してもらい、「物品」「場所」はコンピュータにまかせた。

七月手前現在、手持ちの怪談ストックは「業の章」の次の「蟲の章」の次の「響の章」までであるようなないような。すでにこの企画は半年ほど前にストップしている。この場でどれだけの話が揃うかは、時と運と筆者のやる気にかかっている。

# 業 の 章



なじみのショッピングセンターの駐車場で、彼女は途方にくれていた。

いつものように買い物をすませ車に戻ろうとしたのだが、どこを探しても自分の車が見つからない。無闇に駐車場を歩き回る。ないわけではない、盗難にあうようなお高い車ではないのだ。

やがて彼女はある場所で足を止めた。

目の前には彼女の車と同じ車種の車。型もカラーも同じで、ナンバーも駐車場所もこのあたりだったという記憶がある。

しかし確信が持てなかった。

車内からはひとむかし流行ったポップソングが盛大に漏れていたし、助手席には女。剣山のようないで立ちをした奇妙な女がいた。

彼女はそのどちらも覚えがなかった。厭な考えが浮かぶ。剣山女はじっとりとした視線で彼女を捉えていた。口をパクパクと動かしているが、声は聞きとれない。いや、もとより聞く気などなかった。なのに脚は一步、また一步、と助手席へ近づいていく。やはり声は届かない。窓に顔をよせる。音楽がうるさい。ふいにパワーウィンドウが下り、ボリュームが一気に跳ね上がる。たまらず軽く悲鳴をあげた。

――助手席にはだれもいなかった。

彼女はあっけにとられた。

車内のスピーカーは沈黙している。ほころびのない静寂がそこにはあった。

キーレスエントリーを作動させると、歯切れのよい音とともにロックが解除された。

彼女はうなだれた。

それは自分の車だった。

その夜、彼は酒をしこたま飲んだ。いつもの気持ちよい酔いのまわりがこなかったためである。心なしかいつもほど酒もつまみも美味くなかった。

釈然としないまま店を出たとたん、地面が揺れた。猛烈な痺れと、活発な胃の蠕動。不意を突いた吐き気にたえきれず、側溝に酒気臭い口をむける。

出ない。

胃に痛みが走るだけだった。

――横になりたい。

彼はとにかく自宅を目指した。道々なんどとなくげえげえとやってみたが、咽喉に引っかかりを感じるだけでやはり出ない。脂汗だけが滲み出る。意識を保とうとする`意識、が上滑りしていく。ほうほうと進んでみるが、ものの数分で膝が笑い出した。

限界だった。

その場に突っ伏してみると、諦観にほどよく全身を包まれる。楽になったような気がした。

瞬間、咽喉がにゆるんっ！　とうごめき、ばしゃあ！　と中のものをぶちまけると、今度は本当に楽になった。

ほっとした彼は汚物の中にまるめられた紙くずがあることに気づいた。おそらくこいつが栓の役割をしていたのだろう。ためらいつつも飲み込んだ憶えのないそれを広げる。

〈不当判決〉と筆で書されていた。

彼は帰路にはない道で四つんばいになっていた。意識が鮮明になるにつれ、「またか」という思いにかられた。

裁判所前で紙を吐いたのは、これで三度目だった。

その日、彼女のクラスは午後の二時限を美術室ですごした。

まだ、あの子はそこにはいなかった。

学校が終わると、彼女は駅前の楽器店へ向かった。三階のピアノ教室で最後のレッスンを終えると、ついに明日から完全受験モードとなる。とぼとぼと外へ出るころには、陽は傾きかけていた。

すでに、あの子はそこで息絶えていた。

彼女は一度だけあの子を見かけたことがある。近寄りがたい感じの美人だった。絵が抜群にうまいと聞いて、妙に腑におちた。将来は一流のアーティストになるのだろうと思うと鼻が鳴った。

そこにいたあの子を最初に目撃したのは、彼女のクラスの生徒だった。

美術の時間を終えて一時間半ほど後のこと。置き忘れた財布を取りに戻ったさいの遭遇。どこぞのコンクールで優勝したばかりのあの子は、ゆったりと腰掛けるポーズのまま半分だけ埋まっていた。ずぶずぶと沈み込むように、髪の毛の一本一本まで丁寧に。

そして、たまたま通りかかった教師が、そこで涙滂沱の生徒と冷たくなったあの子を発見する。

この事件はすぐに学校中に広まった。

誰かは「きゅうきょくのあーと」と謳い、あの子は〈レリーフの子〉として甦った。この、あの子の死を自殺と見る傾向は、目撃した生徒が念仏のように呟いていたという「だれもかないっこない」という言葉と、警察の「事件性なし」という判断が大きい。しかし真相は分からない。件の生徒も二度と学校に来ることはなかった。

なにもかもがバカバカしく感じられた。彼女は受験勉強のための貴重な時間を、鍵盤を叩くことに費やした。

美術室は事件から二ヵ月とたたないうちに生徒たちの手に戻った。

入ると、やはり以前より広くなっていた。彼女はあの子のいた場所で立ち止まる。美術室と準備室を隔てていたもののとり除かれたそこは、ぽっかりとした空間がわだかまっていた。

彼が高校生のころのことなので、地元でのことだ。

近所の友人宅でふたりゲームなどをしてくつろいでいた。

夕方、潮の香りが部屋を満たした。大海のど真ん中に放りだされたような、強烈な匂いだった。いくら浜沿いの家とはいえ、ありえないほどの。

しかし、友人は気にしていない風であった。こういうことが友人の家でたびたび起こった。

それから数日後、友人宅に泊まったときのこと。

真夜中、彼は音を聞いた。

——ごぷ、かぼぽ、ぐぴごごご……ひょううう……。

排水管が逆流しているような水音。それと口笛のような細くかん高い音。それらの音が彼の隣、ベッドで寝ている友人から漏れていた。潮の香りは相変わらずだった。

朝になり、彼は友人に声をかけた。寝起きの友人の顔はひどいものだった。目には隈、唇は青紫に変色している。それでも友人は気にしていない風だった。

それからいくらか後のこと。

物置の奥から釣り道具を引っ張り出すと、彼は上機嫌でひとり海へ出かけた。

しかし、その日は朝から昼すぎまでねばったものの、ぴくりとも竿に手ごたえはなかった。海は完全に沈黙していた。こんなことは初めてのことだった。あきらめて帰ろうとした彼だが、奇妙なものを発見する。

堤防と消波ブロックの間。海草や漂流物の溜まりやすいそこに、藁人形があった。よく見るとそれは、消波ブロックの片足に縛りつけられている。隣を見ると、同じものがもうひとつ。結局そんなものが五体ほどあった。

気がつくのと釣竿を握る手が震えていた。藁人形のひとつに友人の名前を見つけたせいだろうか。

ときおり波が`友人、をなでる。そろそろ潮が満ちてくるころだ。

なんとなくそれに触れる気にはなれなかった彼は、むずむずする鼻を擦ると、遠慮がちにそこをあとにした。

帰省途中のことだ。

彼はひとり通いなれた道を走っていた。いつものように溪谷沿いの山道に入る。時間が遅いためか車の数は少ない。数分おきに対向車とすれ違う程度、それも概ねトラックだ。帰省ルートとしては、とくにこれといった心配はなかった。

しかし、その日はやたらと助手席側の景色が気になった。

そこは昼間なら木々の合間から溪流が見える。夜は車のライトがその木肌を照らすくらいで、奥は闇が詰めこまれている……はずだった。

――だとしたら、これはなんだ？

ポツポツと小さな明かり。移動しているようにも見えるそれが、木々の間からもれていた。

彼は最初、懐中電灯をもった人でもいるのかと思った。しかしその情景は数kmにも及び、今なお途切れるようすもないことから、思いなおした。次に精霊流しの線が浮かんだが、早々に打ち消した。灯籠を流すには川が荒々しすぎる、と。

とにかく納得できる答えがほしい。彼は考えた。それをエンジンのうなり声が現実へ引き戻す。暴走気味のセダンが追い抜いていった。かなりのろのろと運転していたようだ。彼はそのまま車を路肩に寄せると停車させた。

外へ出る。山の空気はひんやりしていた。ガードレール越しに川の方を見てみると、やはり懐中電灯のような明かりが揺れていた。耳をすませても、かけっぱなしになったエンジン音と川の流れる音しか聞こえない。

――気になる。ならないわけがない。

ひっこみのつかなくなった好奇心は、ガードレールを超えろとせがみだした。思わず片足をかける。

その時だった。

けたたましいクラクションが鳴り響いた。驚いて振り向く。2トン車が停まっていた。啞然としていると、助手席の窓が開き顔面蒼白のドライバーが身を乗りだしてきた。

「バカなことするな、早く車に戻れ！」

それだけ言うと乱暴に走り去ってしまった。

正気に戻った彼は、素早く車に乗り込むと、同じように乱暴に車を発進させた。



彼がその家にやってきたのは、遺族から依頼を受けたからだ。

その家では無数の動物がぎゅうぎゅうと暮らしていて、近所では〈動物園〉という名で知られていた。住人は年老いた女性ひとり。めったに外出しないというわりには小綺麗な身なりの人の良さそうな老婦人で、ペットたちの世話もこまめにしていた。近隣住人と大きくもめたという話も聞かない。しかし彼女の孤独死が発見されるきっかけとなったのは、お隣さんによるクレームだった。

そのときすでに死後半年ほどが経っていた。

晩夏に亡くなったこの女性は、数日のうちに腹をすかせた彼女の家族たちによって骨だけとなる。冬になると飢餓と寒さが彼女の家族たちを襲った。そこへ不衛生な環境による感染症が追い討ちをかける。凄惨なサバイバルの場となったそこに春が訪れると、たちまち悪臭が膨れあがった。何十匹といた彼らは、発見時には犬二匹と猫三匹を数えるのみだった。

現場にはすでに娘夫婦がいた。軽く挨拶をしてなかに入る。

〈動物園〉内のようすは彼の想像以上に圧倒的だった。鼻の奥を抉るような悪臭。動物たちの破片は重いものから順に堆積され、部屋中を毛羽立たせている。踏み込むと、奇妙な感触。下層では腐肉や糞を好むあらゆる虫たちが宴をくりひろげていた。スタッフたちがうめき声をあげる。彼らはその場で立ち尽くした。ようやく作業にとりかかれたのは数分も経ってからのことだった。

やはり作業は思うようにはかどらなかった。それでも家財道具の運搬に悪戦苦闘していると、スタッフのひとりが奥の仏間から一冊のノートを持ってきた。日記のようだったので、外で待機していた娘夫婦にそれを渡す。ノートには日々のペットのようすが生き生きと綴られていた。故人にとってそれが唯一の喜びだったのだろう。しんみりとした空気が流れだす。ためらいがちにページをめくる手がふいに止まった。みるみる娘の表情が険を帯びていく。

そこにはペットの家系図のようなものが描かれていた。母体からのびる線は幾重にも枝分かれし、広がっていく。それぞれの名前の下には誕生日と命日、あと死因が簡潔に記されていた。「あのクソババア、まだこんなこと……」

それは娘の口から出た言葉だった。

彼は驚いた。娘の豹変ぶりにではない。〈餓死〉の文字が飛び込んできたからだ。家系図は老女の死後も書き続けられていた。いや、彼女の予言として書かれていたのかもしれない。なぜならそこにはまだ命日を迎えていないペットたちがいたからだ。

〈ガス死〉と書かれた五匹。人肉を貪ったであろう彼らは、すでに保健所にひきとられていた。

彼が十歳のころの盆、昼過ぎに家族で墓参りに出かけた。

近所の小さな墓苑だった。彼の家族のほかには人影はいない。やんちゃ盛りの彼は心置きなく墓石と墓石の間を縫いすすんだ。

暑い日だった。草や線香の匂いがそこらじゅうに漂い、セミどもの鳴き声が無数に重なっている。それでも彼は上機嫌で墓場を探検していた。

やがて奥へ突き当たった。そこもやはり墓石が並び花や線香などが供えられている。

「あっ……！」

ひとつだけ、墓場にはふさわしくないものが供えてあった。

バストを露出させながら妖しく微笑む女性の写真。難しい漢字の羅列。それはアダルトビデオのパッケージだった。まだ性の知識に乏しい彼でもこのビデオがいかかわしいモノであることくらいは想像がつく。興味もある。もっと近づいてよく見たい。彼は静かに歩みよった。

「お～い、こっち来て手え合わせなさい」

結局、その日はビデオを手には取ることがなかった。しかしあの妖しげな唇が忘れられない。浅黒い乳首の色もだ。

――明日の朝、ひとりで行ってみよう。

布団に入るところには、決意は固まっていた。

次の日も朝から暑かった。

彼はあたりを警戒しながら墓苑へ入る。人の気配はない。それでもなるべく砂利を静かに踏みながら歩く。胸は高鳴っていた。

女は昨日と同じ墓の前にいた。しかしどこか様子がおかしい。

「にんしんしてる……」

パッケージは膨張していた。彼はそれをそっと持ち上げた。手応えは軽い。空なのかと落胆しかけた瞬間、それが急激に重みを増した。

驚いて手を放す。パッケージは墓石の角にぶつかり、中身をぶちまけた。あたりにクチナシの花が散乱した。ありえないほどの量と異臭。彼は墓前が白で埋もれるよりも早く、そこから逃げ出していた。

見てしまったからだ。

青白い腕を、それが墓石からのびてパッケージを引っ張ったのを。

彼女が手洗いを済ませ出ると、廊下はちょっとした人だかりとなっていた。

カラオケボックス店内のことだ。

啞然としていると、声をかけられる。一緒にきた友人たちだった。彼女らは女子高生のグループと会話していた。その表情は畏怖と興奮が入り混じっている。

「あれ出たよ、サイン！」

「え、うそ、なんで？ いつ？ 大丈夫なの？」

まくしたてる彼女に、友人たちはかみ締めるように説明を始めた。

彼女が席をたってすぐのこと。

唐突にすべてが緩み出した。スピーカーから音楽がやみ、ディスプレイの映像が暗転し出す。やがて、機械的な連続した声のようなものがリフレインを増していった。小さな眩きだったそれは、あっという間に叫びに変わり、黒くぼやけた映像はなにかの形を浮かびあがらせる。それは引きつった笑いを浮かべる唇にも、孵化前のサナギにも、血濡れの果物ナイフにも見えた。

そのころには室内の照明は完全にやられていて、店員に苦情を言おうにも内線もつながらなくなっていた。すぐさま部屋を出る。その瞬間、廊下沿いの全部屋のドアが、示し合わせたかのように開いた。

室内の異常は一分たらずで治まった。

「たぶん皆——このフロアの人全員、見たんだよ。サインを」

友人の言葉に女子高生たちが頷く。

「そんな……」

馬鹿な。

彼女は思った。サインの出る部屋は一七号室だけのはずだ。しかも目撃者が必ず不幸に見舞われるので、今は封鎖されている。

「あ、でも大丈夫ですよ」

不安気な彼女の表情を察してか、金髪の女子高生が口を開いた。

「の○ピーの『○いうさぎ』を歌うと祟られないって話です」

その後、彼女たちは○いうさぎを熱唱して帰った。今でもぴんぴんしている。

ただ件のカラオケボックスは、潰れてしまって今はもうない。

蟲



の章

彼は突然の事故の知らせに、面食らいながらも病院へ向かった。

到着するやいなや地下へと案内される。看護師はなにを聞いても答えない。混乱が不安に飲み込まれる間もなく、彼は霊安室に通された。

厭にうす暗い室内では、母がベッドにくずおれていた。声をかけると悲壮な顔色を見せる。

「おとうさんが……おとうさんがね……」

次の言葉が嗚咽とともに飲みこまれる。隣にいた医者がたまりかねた様子で父の事故死を告げた。

呆然と立ちつくす。そんな彼の鼻腔を血と消毒用エタノールと腐臭が刺激する。血とエタノールの臭いは父から立ち昇っていたが、腐臭だけは奥から漂っていた。

ほかに時間の経った遺体があるのだろう、とそんな考えを弄んでいた時だった。突然、過去の記憶が甦った。

20年ほど昔、彼の家の裏には空き地があった。さほど手入れもされず、半ばほったらかしにされていたそこは、雑草がスラムを形成していた。

小学生の彼はよくそこで草遊びや虫取りをして遊んだ。それなりに気に入っていたが、ひとつどうしても厭なことがあった。

それはカメムシが大量にいることだった。

空き地をひと周りするだけで、2、3匹は身体にくっつく。それを雑に払おうものなら、カメムシたちは辺りに悪臭を撒き散らした。背中に浮かぶ顔のような模様も不気味だった。

まだ糞餓鬼でしかなかった彼は、時どき癩癩を起こしては〈カメムシ駆除〉と称して小さなバケツにカメムシを集め、近くのドブに打ち捨てていた。

そんな彼も学年が上がるにつれ、次第に空き地で遊ばなくなっていく。

高校2年の初夏には、裏に家が建つことになった。

ある日、基礎工事の最中に作業員が女の白骨死体を掘りあてた。毛布にくるまれた骨には包丁らしき創痕もあり、近所を騒然とさせた。この遺体の身元はおろか、犯人の目星もつかぬまま今に至っている。

現場は改めて御祓いと地鎮祭が執り行われ、なんとか完成にこぎつけた。

新築には町内の新婚夫婦が移り住んだが、1年と経たずに空き家となった。母が言うには、新妻が精神病院に入院したためらしい。

彼は盛大に嘔吐いた。

悲しみからではない。初めて嗅ぐ人間の死臭が、小学生のころ散々嗅いだカメムシの臭いそのものだったからだ。小さなバケツいっぱい集められた人面が放つ強烈な死臭（ソレ）。その記憶が彼の内臓を揺さぶる。

大量のカメムシと女の死体、新婚夫婦の悲劇。死臭を嗅ぐまでは無関係な事柄でしかなかった。実際、無関係かもしれない。しかし、ある記憶がそれを確信へと押し上げる。

彼は思い出す。

幼い頃の彼が気まぐれで行った〈カメムシ駆除〉の最中、そこには決まって見知らぬ女の視線があったことを。